

## 会議出席報告書

日本学術会議の行う国際学術交流事業の実施に関する内規第25条第3項の規定に基づき、下記のとおり報告いたします。

### 記

#### 1 会議概要

##### 1) 名称

(和文) インターアカデミーカウンシル理事会及び IAC/IAP ジョイントミーティング

(英文) IAC Board/IAP Executive Committee

##### 2) 会期 平成22年3月21日(日)～3月23日(火)(3日間)

##### 3) 会議出席者名

塚原東吾、唐木英明、中村典子

##### 4) 会議開催地

オランダ・アムステルダム

##### 5) 会議内容

日程及び会議の主な議題

###### 3月21日(日)

Evening IAC session and dinner

###### 3月22日(月)

IAC Board Meeting

Dinner for IAC Board

###### 3月23日(火)

Morning joint meeting IAC/IAP

Afternoon session, IAP Executive Committee

Dinner for IAC Board and IAP Executive Committee at local restaurant

#### 2 報告

「オランダのヤング・アカデミー：成功とその理由についての一考察」

(The Dutch Young Adacemy: its success and reasons for it)

神戸大学大学院国際文化学術研究科・教授・塚原東吾

(序、オランダのヤング・アカデミー)

オランダは、ドイツの例とともに、「ヤング・アカデミー」の先行ケースであり、また「成功例」であるとも考えられている。では、どのように成功したのであろうか？その成功から何か学べるのだろうか、また、なぜ、成功したのであろうか？そして、そもそも、それは成功なのであろうか？

今回、短期間ではあったが、オランダ訪問の際に、オランダのヤング・アカデミーについての情報収集をする機会を得た。そこではヤング・アカデミーのセクレタリー、実際のメンバー、大学関係者（ライデン大学の現役教授や名誉教授）、国際研究機関の渉外・情報関係者（国際司法裁判所の情報担当者）、マスコミ関係者（文化関係担当）、アジア外交（日本関係の文化担当）の関係者など、さまざまな人々

にインタビューをこころみることができた。なにしろ短い滞在（実質 2 日半ほど）だったので、ひとつひとつのインタビューも時間が限られ、満足に議論ができたというものではない。まるで群盲象を撫でているようなレベルで恥ずかしい限りである。しかし、ここではオランダの特殊事情とは何か、というところにひとつの焦点を当てて考えてみたい。そしてこれらの情報を通じて、オランダのヤング・アカデミーのあり方、さらにはアカデミーの取るべき方向性について考えてゆく。

#### （概要）

オランダのヤング・アカデミーは 2005 年、オランダ科学アカデミー（KNAW: Koninklijk<sup>1</sup> Nederlandse Akademie van Wetenschappen<sup>2</sup>, <http://www.knaw.nl/>）が設立を決定し運営が始まったものである。アカデミーの体制の若返りや変化する時代への対応、そして若手アカデミッシュンや研究者の声をすくいあげ、アカデミー活動の活性化を狙ったという。そのような設立の目的や活動などについては、上記のオランダ科学アカデミーおよびヤング・アカデミーのホームページ（<http://www.dejongeakademie.nl/dja.aspx?ch=DJA&lang=NL>）に詳しい。（これに付随する英語のホームページもほぼオランダ語と同じ内容で充実している。）ヤング・アカデミーの正式な名称は、De Jonge Akademie (DJA)、このアカデミーのメンバーシップは、25 歳から 45 歳まで、50 名となっている<sup>3</sup>。ヤング・アカデミーができたことで、従来のアカデミーは「クラシック」アカデミー、もしくは「親」(parent) アカデミー、「旧」(old)、「上級」(senior) アカデミーなど、さまざまな形容詞を付けてその区別が表現されていた。

#### （活動）

目的や狙いなどはアカデミズムの若返りとか活性化、若手の声を反映すること、などやや抽象的だが、このオランダの DJA は現在、以下の 3 つの主な領域で活動している。

- 1 超領域的、学際的な活動
- 2 科学技術政策、学術政策に影響を持つこと
- 3 科学と社会

これらのほうが具体的で分かりやすい。これらについて、以下に説明したい。

1 学際的な活動： ヤング・アカデミーの重要な活動の一環に挙げられており一定の成果を上げている。そもそも DJA のメンバーは、フォーラム的、クラブ的な場に参加することになり、個人的に良い機会を得られる。自分の研究を他の研究者と共有したり、議論したりする場を持つということ自体重要なことであり、優れた者の集まるアカデミーの真骨頂であるのだろう。また個人的レベルにとどまらず、システムティックな領域の融合や交流も企画されており、各種シンポジウムや出版企画も行われている。しかしそれらには「エリート主義的」、また一部の限られた者にだけ与えられる特権 (privilege) であるという批判もある<sup>4</sup>。特に、個人的なフォーラムやクラブとしてのアカデミーについては、やはり反発を受けるのではないかと思ったが、実際には、「そうでもない」という。新聞やマスコミがそのようなエリート性を批判するのでは、という質問に対して、オランダのメディアの対応は全くその逆であつたらしく、「優秀な者たちの交流に期待する」というものであつたらしい。ある意味、反感と言うより期待のほうが大きかったというのは面白い。また学際的な活動は、個人ベースで行われているだけではないか、(組織として、それに対応するのは、難しいのではないのか?)、という批判と疑問に対しては、

シンポジウムや、共同的な問題の検討が行われている例をあげて反批判・対応ができるという<sup>5</sup>。

## 2 科学技術政策、学術政策への関与

基本的に、これは国内への発言で、身分や研究についての政策決定に関するものが中心となっている。地球温暖化や核兵器の削減など、国際的なレベルの問題については現在のところ特に展開はしていない。具体的に取り組んでいるのは、主に若手研究者の観点から、キャリア政策について、および研究資金の配分について、当事者の側からの声をあげて行こうという動きである。より具体的には、研究費配分における資格要件や申請カテゴリーの改正とか、採択プロセスの透明化、配分の研究機関ごとの配分枠の変更などである。

詳細についてはあまりにオランダの国内事情や政策決定プロセス・予算編成分配プロセスに関係することなので、ここでの詳述は差し控えるが、大切な点は「当事者としての声を上げる」という点が力説された。ただ DJA とは、そもそも当事者なのか、当事者の「代表」であるのか、それとも当事者のなかでも「恵まれた一部」であり、代表をするにしても「特権的で特別な層」の声であることに注意が必要である。そうではあっても、このような組織が「若手研究者の代表性」という課題の矢面に立つことになる、というのは、ある意味でまずは窓口としての機能を持つということであり、トバロとして重要であると考えている。

## 3 科学と社会

目的として DJA に課せられた、学術を社会に、という方向性では、必然的に、「科学と社会」の界面の問題に向き合うことになる。いわゆる S T S 的な活動ともいえる。そして DJA はそのために、主に、科学コミュニケーション的な活動を展開してきており一定の成果を上げているし、社会的な認知もこの面でうけている。子どものための「ヤングスト・アカデミー」という活動まである。メディアを使用した形で、DJA のメンバーが社会的に関与している。ここではオランダ語メディア<sup>6</sup>での科学の普及などが中心となっている。

(新旧、親子のヘゲモニー争い?)

もちろん、新しいものと従来のものの間では、競合や主導権をめぐる駆け引きがある。たとえば、メンバーの選出は、設立の当初、最初のメンバーについては「クラシック」アカデミーが(公募、推薦などを通じて)行った。そもそもヤングは実体なかったのだから、そうしなければ仕方がない。ただその後は、ヤング+クラシックのメンバーが、(やはり公募、推薦などで候補を募ったあと)、インタビュー・協議を行い(ヤングが最終的な決定権を持つようなかたちで)選出する形になってきたという。ある意味、世代間のトラブルが過去のこととなったヨーロッパ型の成熟した役割分担でもあるし、実際にアカデミーのメンバーに言わせるなら、オランダ型のコンセンサス志向の表れだともいえるらしい。基本的に、親は子の決めることや活動の方向性に口出しはせずに必要な資金・資源だけを与える、そして子の自立と独自性を信頼して、親も子も相互に活性が高まることを期待するという形のようだ。基本的に、子は自立を促すように教育されており、自己主張も強く、親もそこで子を手放すのがうまい。また親の一部が特定の子(集団)をパトロナイズしたり、ある種パターン的に振る舞ったり、子の中で特定の利権誘導のようなことが起こったり、いわゆる親の既得権益の代理闘争の勃発などという

ような、危惧されるような問題は寡聞にしてまだ発生しているとは聞かない。成熟した、大人の親子関係が、クラシックとヤングの相互交流がうまく営まれているように見受けられた。敢えて世代間の差異を強調するのではなく、一定の緊張感を保ちながらも、オランダの世代間関係とは、相互の信頼とコンセンサスがうまく機能している事例であると考えられる。

(知性の権威とエリート主義：科学をめぐる概念の文化的違い)

このDJAは、優れた若手研究者を集め、指導的な若手アカデミッシュの活躍の場を作る、ということが目的のうちに高らかに謳われている。ある意味「知的に優れていること」、「研究上の業績も将来性も遜色がないこと」、それでいて「アカデミー活動のような社会活動に積極的に参加すること」が求められている。このような宣言には、若干、面映ゆい感がするのは、私が日本人だからであろうか。欧米の自由な競争的研究環境の中にと、しっくりする言葉ではある。しかし日本では、若手研究者と呼ばれる年齢期には、研究上の業績を一本でも多く出すことに汲々とせざるを得ないし、すっきりと「知的な優位性」が担保できるというのは、どのような状態を言うのかやや戸惑うものでもある。またこれは、ある種のエリート主義を自ら任じることであるだろうし、そういった直裁なエリートイズムに対しては、やや気おくれを感じる。そもそも「知的リーダーシップ」などという概念をストレートに言うことにはばかりのある日本の知的環境からは、なかなか優れた若手の育成や、リーダーシップのトレーニングなどという概念は育たないことで、オランダのような典型的な「近代」人を生み出した知的風土との違和感も感じる。ただ、だからこそ、そのような若手の（知的な面での）リーダーシップ集団こそが、今の日本に最も求められていることであると言えなくもない。実業界や政界でも世代交代には大きな問題を抱えてきたと聞かすが、アカデミアにおいてはなおさらであるかもしれない。

「知的なリーダーシップ」とは何を意味するのか、ということについては、オランダ語の「科学」、「学術」に関する語の問題でもあるので留意しておく必要がある。そもそも日本語に直訳するには、大きな問題がある概念でもある。一般には「科学的(wetenschappelijk)なリーダーの育成」と強引に訳しているが、この「科学的」とはドイツ語の Wissenschaft とほぼ同じ概念で、学術もしくは学芸総体・知識そのものを表す、英語・フランス語系の「サイエンス (science)」よりも広い概念である。サイエンスをめぐる英・仏・独の歴史的な概念については、中山 (1974) が論じたように、ドイツ系の Wissenschaft がもっとも広い意味を持つ。しかもアカデミーの名称としては「複数形」の、Wetenschappen であることは、大きな意味を持つ。またアカデミーの形成において、歴史的には”konsten (kunsten) en wetenschappen (arts and sciences)” という概念もあり、これには arts (技術、芸術を含む) もあって (自由)「学芸」に近いが、さらに広い概念である。いわゆる通常の議論でも、「科学的たれ (つまり wetenschappelijk になるべきだ)」、という言い方が多用されるが、「知的に対応しよう」とか、「情報を整理して落ち着いて考えよう」というニュアンスである。ちなみにドイツではアカデミーに (実技的な)「芸術系」は入るが、オランダでは (まだ)「入っていない」という。また体育・マーシャルアーツなどの「技芸系」も入っていないし、軍事関連の「(ミリタリー) アカデミー」なども、オランダのアカデミーの範疇ではないことは留意事項であるだろう。日本には大学レベルとして、理学部や文学部と並列で、音楽も体育も専門の学部や単科大学があるという、オランダでは、一般によく驚かれる。

(国籍条項がないという特徴)

DJAのメンバーに、国籍は不問である。これはオランダの特徴と言えるかもしれない。ただ、オラン

ダの研究機関に所属している、もしくは何らかのかたちでオランダに関与していることだけがヤング・アカデミーのメンバーになるための条件である。国籍は不問であったとしても、現在の所属においてはオランダであることが求められている。現実的な現地主義である。これもしかし基本的には、「自己申告」を元にして（ようだ）<sup>7</sup>。ある意味で若手の研究者のポストが流動化していること、またヨーロッパの中部の要ともいえる位置で、国籍よりもメリットを重視するアカデミーの成果主義・実力主義などがここに反映しているのだろう。グローバル化の時代であるとか、知のユニバーサリズムやグローバルゼーションという概念を、問題なしとは必ずしもしたくはないのだが、ある意味で「高級人材」（中国語）とさえ呼ばれているアカデミーの研究者層については、できるだけ公平性を持ち、門戸を開く必要はあるだろう。

現在、日本のアカデミーおよび若手アカデミーも、現段階で国籍条項を設けて入るが、これがグローバル化を阻害している、もしくは日本のアカデミーの閉鎖性の象徴であるのではないかという疑義を呈されたり、批判を受けたりした場合、どのように対応していくかはあらかじめ検討されておかねばならない課題のひとつであると考える。

またオランダのアカデミーの定義として（注2でも論じたが）、ミリタリー・アカデミーは除く。また音楽系のコンセルヴァトワール、体育系・教育系諸機関も除かれている。（ドイツはこの辺は微妙に異なる。）

（オランダの社会のおかれた状況とそこでのアカデミーのミッションについての若干の分析）

DJAの事業は、おおむね「成功」と言えるだろう。

おもったより多くの人に認知されているし、メディアでのカヴァーも広い。

平均寿命が延びた成熟社会において、いわゆるクラシック・アカデミーだけでは、社会からの問題意識、学術（科学技術と社会の問題）に対する社会からの要請に対応し切れていない部分を補完するという役割を果たし、また若手の研究活動を活性化させるために、若手からの「声」を集約する役割、そして若手のリーダーシップを養成する場としての高度の超領域的、学際的なフォーラムとしての役割など、それぞれ活発に運営されている。

しかし、こんな例もあった。筆者が院生時代からお世話になっている、厳格で知られるある著名な名誉教授にお会いしたとき、このオランダ訪問の理由を問われ、ヤング・アカデミーのことをお伝えしたらすごい勢いで怒られた。

ツカハラくん、キミは、そんな幼稚園の設立みたいなことに、かかわるべきではない、そんなことより、きちっとした自分の仕事をしなさい、と。

耳が痛い、というより、ある意味で、想定された反応でもあった。

また、このような反応は、必ずしも上の世代からだけではない。

ただ、この教授がおっしゃられるように、自分の仕事に集中できた日々とは、すでに、遠い過去のことではなからうか。幼稚園の設立のために時間を割くことも必要なのではと抗弁しなくなった。幼稚園の設立という比喻はやや極端かもしれないが、先生は、こちらの議論を呼び起こす、典型的にオランダ的でプロヴォカティブな方である。流石、俚言どおりにダッチ・アンクルである。こちらはそれにまた乗せされたのだが、この「幼稚園」には（1）次世代の育成には、平均寿命の長くなったこの時代、また「研究環境」や「研究をとりまく国際的状況」、さらに「学問研究のインフラ」自体が、大きく変容し

ているので、現役の最後のころにやっと次世代を育成するというより、早めに同世代のためのトレーニングの機会を作っておくほうがいい、そひてそのようなリーダーシップのトレーニング機関が必要である。

(2) 幼稚園があると、自分は自分で「自分の仕事」に集中しやすくなる、という2つほどの理由が思いつく。そしてさらにいうなら(3) 大体からして、待機児童がいるのでは社会としていけないことであるように、幼稚園もないようでは、アカデミアを支える十分な社会体制であるとは言えないのではなかろうか。また藪から棒かもしれないが(4) 今のアカデミアは、「自分の仕事」をしていればいいというほどの余裕は、すでになくなっているのではなかろうか？ 結論：アカデミアに「幼稚園」は必要であると考えられますし、私は幼稚園の設立に時間を使います。厳格で、シニアでクラシックな先生は、これをいかがお考えになるであろう。次にお会いする機会が楽しみである。

(オランダのアカデミアの置かれた大状況：ミドルパワーとしての進路選択と日本のアカデミア)

そこで、さらにこのような状況を考察するために、とりあえず、日本の問題はさておいて、オランダのアカデミアの抱える問題を概観してみよう。オランダでも、ポストの減少や博士号取得者・若手アカデミシヤンの過剰生産（による就職難や不安定雇用の問題）、ネオリベラリズム的な政策に伴う（すなわち「自助努力」の掛け声による）学術政策の変容（より実用志向・産業志向、資金自己調達型の推奨）、予算の削減など、日本と同じように、ポスト冷戦・ポスト金融危機の時代性によるものがある。ギリシャ危機以降、ユーロの不安定感は大きく、EUを牽引してきたオランダだが、外交・内政ともに、さまざまな問題の根源的な見直しを迫られている。

さらに、ヨーロッパの特有の問題として、EU統合によるアカデミアの人材の高い流動性、アメリカ（アングロサクソン）化してしまった学位システムやアカデミアの褒章システムによって、旧来の国内市場を主に対象としていたアカデミシヤンが排除されつつあることは深刻な影響を生んでいる。さらにアカデミズムの過度の「英語化」によるバナキュラー層との乖離（これは極右やナショナリズム、新たな民族主義の高揚を生みだす温床になっている）など、安穩としては居られない状況が生まれている。バナキュラー層の教育にヤング・アカデミーが一役買っているというのは、その意味で興味深い現象である。

また、大局的に見るとヨーロッパでのオランダのような小規模国家から中規模国家（ミドル・パワー）やスーパーパワーへの（もしくは比較的貧しい南部ヨーロッパやヨーロッパ・ペリフェリイから、豊かな北欧とベネルクスへの）ブレイン・ドレインや、その逆にインド・中国などからの競争的人材の流入、またこれら競争的人材の還流によって可能となるグローバルなアウト・ソーシングによる本国のアカデミズムの空洞化など、グローバル化にともなって、さまざまな問題が生まれている。

オランダは、EU域内でのアカデミック・ポリティックスにおいて、ある種の存在感を示すために、ミドル・パワーズの間でのエージェント、トランスレーターとして振る舞うという役割が伝統的にあった。この役割は、政治学者や歴史学者に言わせると、ベネルクスの「バッファー機能」という。ベルサイユ条約の時代から、この（緩衝）機能が期待されていた。ただアカデミック・ヒストリーの面からみれば、バッファーというよりより積極的な知的なブローカー、もしくは活動的なエージェントとしての機能が、オランダのアカデミアには存在していた。それはニュートニズムを大陸では最も早く受容し、ローマで有罪とされた謹慎中のガリレオの最後の著作を出版したり、フランスに居にくかったデカルト

を受け入れていたのは、オランダの面目を躍如させた科学史上の事件でもある。ナチに追われたアインシュタインの中継点もオランダであった。何よりも鎖国時代の日本にとって、オランダは、ヨーロッパの学術の成果を伝えてくれる大きな存在であった。

このようなオランダは、アカデミアの直面する状況を打開するのに、どうしているのだろうか？

日本が、その将来像としてスーパーパワーや、スーパーパワーのサテライト国家をめざすのではなく、成熟したミドル・パワーという発展モデルを選択するとするなら、オランダ社会とオランダのアカデミアの取る指針は、蘭学の時代と同様に、今の日本に大きな示唆を与えることになる。まだまだ日本のとるべき道は、蘭学的な伝統の継承であり、蘭学者の魂は、再生させなければならないと、言えないこともないだろう。

少なくとも、DJA は、50名の若手アカデミシャンが、このことに真剣に取り組んでいる。このことは、流石は豊かな北部ヨーロッパの近代国家であると感じさせるものである。

---

<sup>1</sup> KNAW は、The Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences というのが、公式の英語での翻訳。ここでは王立 (Royal) がつく。しかしイギリスと同様、この場合の Royal は、特に王家が資金や勅許を出したなどの直接的な関与はなく、単に後付けで公認・権威づけしているという程度でありそれほど意味はない。KLM (航空会社) にも、いわゆる王立を意味する K が付いているが、実質的な所有関係や経営権はないのとはほぼ同じくらいの意味である。DJA のほうには、Royal がない。ただ、このことに意味付けがあるのかどうかは、人によって見解がことなる。権威主義の否定と読み込む人もいるし、別に大したことじゃあない、という見かたもある。D は、単なる冠詞の De。

<sup>2</sup> 中山の議論は、以下のとおりである。

	英(サイエンス)	仏(シアンス)	独(ヴィッセンシャフト)
数学		○	○
理論科学	○	○	○
実験科学(工学)	○	○	○
人文・社会科学			○

村上陽一郎は、科学(サイエンス)と技術(テクノロジー)は峻別されていたとしている。塚原は、学術、科学技術、科学/技術など、学術をめぐる日本語の用語は、ドイツ的なヴィッセンシャフト概念にやや近いとみている。

<sup>3</sup> 設立当初は、40名を選出して開始、毎年10名交代。そのため、(40+10+10+10+10) 設立4年は、最大の80名までになるが、5年目で、+10-40で50名になり、その後は+10 -10で定常化する。

<sup>4</sup> もちろん、そこには、this is the privileges of merit, not the privilege of birth という意味で、生来の(意味なく与えられる天与の)特権ではなく、功績や実力に対して与えられる特権なので、meritocracy (能力主義、実力主義)によるものである。批判には値しないという見解や、この privilege は、ある意味で noblesse oblige (ひとつめの e にはアクサン、nobility obligates)、その身分に伴う徳義上・倫理的な義務を伴うものであり、不当な権利付与にはあたらない、などの反批判もある。

<sup>5</sup> 開催されたシンポジウムや共同研究は、2005年(時間論)、2006年(認知)、2008年(不確実性)、そして2009年は(人間を製作する可能性について)をテーマにしたもので、2009年にはこのテーマでの本も刊行している。(この本のタイトルは、英語で

---

は” The Malleability of Man”ともされているケースも見受けられるが、そもそもは”De maakbare mens”(2009) というもので、英文タイトルでは、登録されていない。その英文タイトルで探すと、アマゾンやオランダの図書館のウェブでも見つからない。ちなみにオランダ語のタイトルとその概要は以下の出版社のHPを参照のこと。

<http://boeken.vpro.nl/programmas/24214180/afleveringen/42352734/> このタイトルの意味はもっとも直訳で” the makable (make + able) people” となり、英語の malleability は、金属や固体、そもそも結晶学的な意味での可塑性や展性についての、やや専門的な用語であり、オランダ語の maakbaar (maakbare) は英語では plasticity (一般的な可塑性) に近く、作る (maken/maak = make) に、可能性を表す語尾 (+baar = able) がついただけの、非常に一般的な言葉。そのため、書誌としては、英語は敢えて付さずに日本語にして「人間の製作可能性」もしくは「人間の可塑性」というタイトル訳を付けておく。

<sup>6</sup> 科学の世界のリングア・フランカである英語の席卷する欧州で、これが新たなヴァナキュラー・ムーヴメントの先頭を走る形になっていることが特徴的で面白いと思った。そもそも、グーテンベルグ革命が聖書のヴァナキュラー化をもたらしたことを髣髴とさせるが、現在の科学教育、そしてヨーロッパの教育における英語の席卷は、ある意味、弊害もうんでいる。そこで新教プロテスタンティズムのなかでも(聖書と個人が直接向き合う)、もっとも先進的なカルヴィニズムのオランダが、またここで、ある種のヴァナキュラー化の努力を進めて、科学と個人を「直接向き合わせようとしている」こととこれを考えるなら、実に興味深い。マックス・ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義にかんするテーゼさえ思い起こさせる。

<sup>7</sup>過去に、任期中にドイツに移籍したメンバーが、自己申告でメンバーを脱退した例がある。